

薄幸令嬢の逃亡生活

く逃げ出した先で幼馴染に溺愛されていますく
1

人物紹介

テオ

リウアの幼馴染を名乗る美青年。隣の獣人の国から来た使節団員。

リウア・オルヘン

オルヘン伯爵家の令嬢。実父が亡くなってから義母や義妹たちから虐げられ、使用人同然の扱いを受けている。



グレッグ

ラモーナの愛人。ラモーナ達を操り、伯爵家の実権を握ろうとしている。

ラモーナ

リウィアの義母。リウィアを疎ましく思い、虐げている。

カトリン

リウィアの義妹。ラモーナの実娘で、リウィアから婚約者を奪おうと画策する。

フォーレ・ビアント

男爵家の三男。グレッグの差し金でリウィアの婚約者になる。

薄幸
令嬢の
逃亡生活
1

逃げ出した先で
幼馴染に溺愛
されています

目次

序 幕	はじまりは、覚悟をもって	006
第一幕	逃げる、その先	011
幕 間	オルヘン家の異分子	062
第二幕	新生活は雑用から	070
幕 間	オルヘン家“執事”の焦燥	124
幕 間	メギドラの太陽	132
第三幕	名前のついた気持ちと覚悟	136
幕 間	もう一人の伯爵令嬢	184
幕 間	オルヘン夫人の誤算	191
第四幕	何もかもを取り返す	197
幕 間	わたしは悪くない	247
幕 間	誰が悪いかと問われれば	251
終 幕	薄幸令嬢はもうおしまい	256

序 幕 はじまりは、覚悟をもって

(……逃げよう。ううん、逃げなくちゃ)

唐突に、そう思った。

粗末な部屋で一人きり、痛む頬ほおに添えていた手を外す。ズキズキと痛むけど、そのおかげで踏ん切りがついたのかもしれない。

ぐいっと手の甲で鼻血を拭い、軽く振ってそれを床に落とす。

先程、義母に扇子で殴られたのだ。

この家では、誰も心配なんてしてくれない。

それどころか私のそんな姿を見て、みんなが嘲笑あざわらうし、いい気味だと思っているのだ。扇子で殴りつけておいて、その扇子が折れたと余計に怒る義母も。

その傍らでニヤニヤ笑ういけ好かない執事も。

少し離れたところで『見て、あんなに鼻血が出て……なんてみっともないのかしら!』ってせせら笑った義妹も、その彼女の肩を抱きながら一切こちらを見ない仮初めかりその婚約者も。

そうして汚いから部屋にいろと追い立てられて、怪我けがの手当もされないまま一人な私。
(これ以上私は、私を傷つける人たちの傍そばにいちやいけない)

私を守るのは、私だけ。

私はぐつと拳を握って、ボロボロの室内を見回した。長年使った私の部屋。だけど、私のものは何一つとしてない。

私に唯一残っているのは、この身と名前だけ。

オルヘン伯爵家の長女リウイア。名前だけの、跡取り娘。

（この思い出の詰まった屋敷をあの人たちの好き勝手にさせたままになんかしたくないけど……）
それでも、このままここにいたら、私の貞操も、命も、何もかもが危うい。

そうやってグズグズしていたせいでまた殴られて、ようやく覚悟が決まった。

自分の甘さを悔やみつつ、強く強く^{まぶた}瞼を閉じて——次に目を開けた時にはもう、部屋を出て振り返ることはなかった。



私の不幸は、両親の死から始まった。

六歳の時に母が病に倒れ、その四年後、十歳の時に父が再婚した。

再婚相手には連れ子がいて、その時はそれなりに仲良く暮らせていたと思う。

けれどその二年後——私が十二歳になったばかりの頃だったろうか。

その日は、酷^{ひど}く天気が悪かったことだけは覚えている。

領内でもあちこちで被害が出るほどの天候不良。

当時の私は義母と義妹と肩を寄せ合い、震えるしかできなかった。

お父様は大丈夫だと私たちを宥め、優しく微笑んでくれた。

『雨が小降りのうちに橋の状況を確認してこよう。人を集めないといけないかもしれない』
そう言つて父は領主として視察に出て、そのまま帰らぬ人となつてしまった。

そこから、私の扱いはすっかり変わった。

父の葬儀が終わつた途端、今まで優しくつた義母は豹変した。

まるで別人が乗り移つたのかと驚かされたものだけれど、今思えば猫を被つていたのだらう。

義母は彼女の実子だけを可愛がるようになり、私はメイド扱いになつた。

本来であれば家を継ぐのはオルヘン家の直系である私だ。

しかし私が未成年であつたことから、その保護者として義母は実権を握ることとなる。

父と正式な婚姻関係にあつた以上、それは当たり前前で、私も疑問は抱かなかつた。

そう、葬儀までは仲の良い家族だつたのだ。

誰がいきなり直系の娘を蔑ろにすると思うだろうか？

けれど、勢いづいた義母は止まらなかつた。

義母の言動を諷めようとする使用人もいたけれど、使用人の数は一人、また一人と減つていった。
自分たちが贅沢できないから、余計な使用人を雇っているのは無駄だと言つて。

そうして昔からいた人はほほいなくなり、怪しげな執事と、その執事が連れてきたガラの悪い使用人たちが働くようになってしまった。

その執事が義母の愛人であると知つたのは、その直後だ。

新しい使用人たちも真面目に働くつもりはないのか、義母たちは落ちた生活の質の分だけ鬱憤を

溜めてはそれを私にぶつけるようになった。

掃除も行き届かなければ、洗濯や料理の質も下がったのは使用人が変わって、しかもやる気がないので当然のことだ。少し考えればわかることである。

でも義母はそれもこれも全て私のせいだと怒鳴り散らし、殴る蹴るとやりたい放題。

……そしてそんな状況になっても、誰も助けてくれなかった。

(生活の質が下がった分は、私が働いてなんとかしろとまで言われたつけ)

掃除なんてやったこともなかったのに、殴られたくなくて頑張った。

料理だって毎回怒鳴られながら、なんとか形になっていった。

挙げ句の果てに文字の読み書きができるのだからと領地の経営も私の仕事だと押しつけられた。

どれもこれも、やらないと殴られるから、食事を抜かれるから、必死でやるしかなかった。

とにかく生き延びることを最優先に考えた。

死んだ母から『どんな時でも諦めるな』と、そう教わっていたからだ。

何度挫けそうになったかわからない。

ガラの悪い使用人たちに馬鹿にされるだけでなく、成長してからはい・や・ら・し・い・目で見られること
もあって恐怖を覚えたものだ。

それでも私を傷物にするなど義母の愛人でもあるグレッグが彼らの行動を抑止してくれたおかげ
で、無事でいられた。そこには感謝している。

たとえそれが私をいのように扱うためのものであっても、だ。

(でも、もうそれもおしまいよ)

この国——ユノス王国での成人は二十歳^{はたち}。

あと半年で、私は成人を迎える。

そうすれば、私はあの人たちから解放されるのだ！

第一幕 逃げる、その先

何故、私は虐げられたのか？

嫌いならば見捨てればいいではないか。

しかしそうはできない。その理由は簡単で、とても利己的なものだった。

私に爵位継承権がある限り、義母は私を放り出すわけにはいかない。

たとえ可愛い我が子がいようと、オルヘン家の直系は私なのだから。

あくまで義母が今の貴族としての暮らしが送れるのは伯爵である父と結婚したからであり、世間の人たちから『伯爵夫人』と呼ばれるためには私の後見人ではないなければならない。

華やかなことが大好きで、奥向きのことを何一つやっていなかった義母はそれらを全て私に押しつけた。それがわかったのは、父が亡くなってからだ。

古くから我が家に仕えていた侍女頭に家宰の雑務を押しつけつつ、愛人を使って彼女の家族を人質に取り父には内密に、伯爵家のお金を好き勝手していた事実を知った。

私が一通り侍女頭から仕事を引き継ぐと今度は彼女を解雇し、高らかに笑っていた義母のことは忘れられない。

『ああ、ようやく無駄金を払わなくてよくなった！ 痩せつぼちの老いぼれ雌鶏めんどりなんて見かけるだけで気分が悪かったもの。散々偉そうに嘯さえずっていたけど、これで仕事も失ってざまあみろよねえ！ あつはは、本当にいい気味だわあ!!』

侍女頭は元々、ふっくらした優しい風貌の人だった。

父が亡くなって使用人の顔ぶれが変わっていくに従って、どんどん痩せてしまって……私が最後に見た姿は、まるで別人かのように痩せ細ったものだった。

彼女は何度も私に頭を下げて、今は亡き父に謝って、そうして去った後のことは知らない。愛人にとって代わられた家令もどうしていることだろう。

今の愛人は執事とは到底呼べない。

仕事はしないし、見た目は整っていても口は悪いし仕事もしない。金遣いも荒い。

伯爵家の財政はすっかり彼らに食い荒らされてしまったのだ。

義母の愛人といっても立場はあちらの方が上なのだから、本当に父も私も見る目がなかった。

（……お父様は、人が好^よすぎたのよね。そして私は何も知らない子供だった）
結果は覆せない。

そうして私は反抗すれば怒鳴られ、殴られ、時には閉じ込められました。

次第に大人しく振る舞い、やり過^すごす術を覚えた。

そんな私が服従したと思つたらしい義母から、執務や雑事を押しつけられるようになった。

令嬢として学ぶべきことも、年頃の少女が楽しむものも何一つ知らないまま、私は屋敷の中の限られた部屋を行き来するだけの生活を送るようになったのだ。

まだ良識ある使用人たちが義母に隠れて私の世話をしてくれたおかげで、ある程度は世間のことや生活の知恵を知れたことだけは救いだつたと思う。

それがあつたから、なんとか元気に生きていられるのだ。

けれど、横の繋がりはどうしようもなかった。

社交デビューをしていない私に貴族社会の知人はいない。

残念ながら頼れるはずの親戚たちは、義母が何をしでかしたのか絶縁状が届く始末。

逃げ場のない私をこのまま成人するまで飼ひ殺して、その後はいいように傀儡にする計画であることを知っている。ここしか居場所がないと思わせるよう、私の希望を摘み取って、暴力と罵声で氣力を奪っていったのはそのためだ。

でも逆を言えば、彼らを騙す手段にもなると気づいたのはいつだったか。

とにかく残すところあと半年となった今、彼らは私が扱いやすい駒になったと信じている。

（今日が最後のチャンス……）

これを逃したら、次はいつになるかわからない。

残り半年という限られた期間で、同じ幸運があと何度あるか。

（いいえ、きつとないわ。あの人たちが全員がいなことなんて……）

義母と義妹はどこかのお茶会へ行った。義母の愛人である執事は予定があるとかで出かけた。

彼らが出かけたのを確認した後、やる気のない使用人もどきたちは私を見張っていると指示されたにも拘わらず『ボスが帰ってくるまで大人しくしとけよ。オレたちの分まで仕事しとけ！』と私に吐き捨てただけでさっさと好き勝手に散ったのだ。

逃げ出すために、私はずっとずっと、計画を練っていた。

どこまで通用するのかなんてわからないけれど、何もしないと心が折れてしまいそうだった。

約六年間、暴力と罵声に耐えながらただ息を潜めて、諦めずにいるのは大変だった。

彼らの目論見通り、私は彼らに怯えている。

なんだったら、蔑む表情や罵声を思い出すだけでも足が震える。

でも怯えてばかりもいられない。

あと半年の間にまた機会があるかも……なんて樂觀的なことを言っていたら、もつと酷い目に遭うかもしれないのだ。

オルヘン家の印章でもある指輪は義母に奪われたままだけれど、このままでは胡散臭い婚約者と結婚させられ、これまでと同じ奴隷同然の生活が待っていることは明らかだ。

結婚式は成人したらすぐという話だけど、逃がさないように既成事実を作るべきか……なんて話をしていたのを私は知っている。

だからもう猶予はない。

わかっている、わかっているのに足が竦む。

(でも、もし……もし、見つかったら？ 連れ戻されたら……)

また鞭で叩かれる？ ご飯を抜かれるどころか、泥を口の中に入れられる？

それとも虫やネズミのいる真つ暗な倉に閉じ込められる？

あの人たちならやりかねない。というか、やられてきた。

そうした経験が、私の足を竦ませる。

だけど……だけでもうこんな生活はごめんだ。

(諦めちゃ、だめよね)

私はもう大人なのだ。



自分を鼓舞して竦む足でも前へと進まなければ。

誰かの助けを待っているだけでは、もうどうにもならない。自分で決断をするのだ。

今は何も持ち出せない。

私は私が、リウイア・オルヘンである証明を、何も持っていない。

何を持ち出してもオルヘン家の財産だから、今の私では証明できない。

当主代行である義母が『盗まれたものだ』と言えば全てが私のせいとなり、より強固な枷が嵌められることになるだろう。

(悔しいな)

何一つ持ち出せず、私が私であることの証明すらできないことが歯痒い。

十二歳から閉じ込められてきたとはいえ、生まれ育った家から逃げなければならないなんて。

「いつか取り戻すわ。取り戻してみせる」

私の尊厳も、オルヘン伯爵家の名誉も、両親の思い出も、何もかも。

そうよ。私は、決して、諦めないんだから。



(……意気込んで出てきたのはいいけど、これからどうしよう)

私は途方に暮れていた。

荷物は数枚の着替えと、なんとかこの一年で貯め込んだ銀貨が数枚。

オルヘン邸の庭仕事をしている中で、塀に穴が空いているのはだいぶ前から気づいていた。本当なら直さなくちゃいけないってわかったのに、どうしても塞ぐのはだめな気がして……私は適当な資材を積み上げて、隠したのだ。

庭師も下男もお金の無駄だって解雇した義母たちはそんな私の行動に気づくはずもなく、私はそこから脱出した。

一応、門番や巡回の使用人だけは置いておいて……彼らの仕事は適当なもの。

きつと今も私がいなくなったことに誰も気づいていないはず。

(とりあえずこの銀貨があれば当座は凌げるだろうけど……)

それだって一般メイドのお給料一ヶ月分ってところなので、早急に仕事を見つけないと飢えること確定だ。成人するまで身を潜めるにしたって生活しないことにはどうしようもない。

どこかで部屋を借りるか何かして、食事だってなんとかしなくちゃいけない。

半年間、身を潜めて暮らすためにはもっとお金が必要だ。

そのくらいのことには世間に疎い私だってわかる。

(でも仕事ってどうやって見つけるんだろう……?)

家にいた時は義母やその愛人に仕事を押しつけられていたから、考える暇もなかった。

あれをやれこれをやれて言われるままにメイドや料理人たちに習って覚えての繰り返し。

そういう意味では成人間近とはいえ、私はあまりにも世間というものを知らない。

たとえば、私は地図を見ることが出来る。地図上にある町の名前を知っている。

でもこの道を行けば領内でも大きめの町があるとわかっていても、そこからが問題だ。

どうしたら生活に繋がるのか、わからない。

市場で野菜がどのくらいの値段かを知っていても、実際に売り買いがどうされているのとか、お金のやりとりってどうしたらいいのとかまるでわからない……といった具合だ。

あくまで私の中にあるのは知識だけ。

ああ、なんてちぐはぐなんだろう。

領内の運営に関係ある相場や地図、取り引きをしている商會が通るルート……そういったことは頭の中に入っているけど、実際のことは何も知らない。

ただ不幸中の幸いなのは、そうした仕事の中でお金の価値についてだけは学べたってことかな。これがいいことか悪いことか、判断はつかないけれど。

（本当に、町と反対の道を行くんでいいのかな……ううん、大丈夫よ。普通に町に行ったんじゃすぐにバレちゃう……！）

今やオルヘン伯爵家で働く使用人は、義母とグレッグの命令を聞く人たちだけだ。

ということとは、町に行ってもあの人たちに知られる危険がある。

父を知っていて私を助けてくれるような人がいるかどうかともわからないし、なによりグレッグたちの手がどこまで回っているのか私にはわからない。

かつて働いてくれていた使用人たちがどこに住んでいたのか、どこに行ってしまったのかも知らない私は、頼れる人がいないことを前提に動かなければいけないのだ。

どうやったって慎重に行動する必要がある。

なら義母たちがちよくちよく遊びに出ている町に行くなんて危険は冒さず、反対方向にある小さ

な村から乗合馬車で、領外を目指す方がいいと考えた。

とにかくグズグズしてはいられない。

もう逃げ出してきてしまったのだから、今更怖じ気づいたところでもないのだ。

私は自分の頬をぺちんと叩き、気合いを入れた。

(……そうよ。私は成人まで逃げ切つて、オルヘン伯爵家を取り戻してみせるって決めたの)
気を取り直して歩き出す。

ある程度行つたところで振り返れば、私が暮らしていた家はちょっとだけ小さく見えた。

(いつか、帰るからね)

知らない家のようになつてしまった、懐かしの我が家に背を向ける。

もう、振り返らなかつた。



途途中で、休憩を挟みながら歩く中で、気づけば私は昔のことを思い返していた。

義母のラモーナと義妹のカトリンは、家族になった当初はとても良い人たちだった。

新しい家族と上手くやっついていけるかと緊張していた私は、彼女たちの笑顔に救われたものだ。

ちよつと香水の匂いが強いけど、家族が大好きだって大げさなくらい毎日言葉にしてくれるラ

モーナのことを好きだった。

年齢が半年しか違わないのに『お姉様ができて嬉しい！』って後ろをついてくるカトリンはとて

も可愛かった。

二人とも、私の大切な家族だった。

(……でも、そう思っていたのは私だけだったのよね)

父が亡くなったと連絡が来て、葬式が終わって、弁護士なのかなんなのか……。

幼かった私にはわからないけれど、とにかく遺産や爵位はどうのこうのって話をしに来た人たちが大勢いて、何もかもが慌ただしかったことだけは覚えている。

そしてその人たちが帰った途端、義母は豹変した。

あれはまさしく——そう、人が変わったときか思えなかった。

『ああ、くそったれ！　ようやく貴族の後妻に入れて贅沢な生活ができると思ったのにポックリ逝きやがって!!　跡取りはこの小娘!?　成人まで養育して爵位を継がせたらあたしたちに出て行けだって!?　フザけんじゃないわよ!!』

『お……お、かあさ、ま……?』

『お義母様ですって!?　ああ、ははっ、そうねえあたしはいい母親を演じてやってたもんねえ！

老後も安泰だと思えばお前みたいな小娘に甘い顔をしてやれたけど、あたしたちがあんたのオマケ?　そんなわけないわよねえ、あんたこそがオマケなのに!』

『ひ……っ』

花瓶をなぎ倒して叫ぶ義母は、私の知らない人のようだった。

それまで朗らかでちよつと声が大きいくだけでおおらかな人だと思っていたのに、唾を飛ばしながら私を睨み付けて怒鳴る姿は本当に、本当に知らない女性のようにしかなかった。

いいえ、あれが本性だったのだけれど。

(お父様とラモーナの再婚は、知人の紹介とか言っていたつけ……?)

それが誰なのか、今はもうわからない。わかれば文句の一つも言っただけなのにね。

義母を紹介した理由が善意だったのか悪意だったのか……。

ただ、父が亡くなってからわかったことは、義母は私のことが嫌いだったってこと。

私がオルヘン伯爵家の直系で、唯一の跡取りであることが気に入らないらしい。

でもよその国は知らないけれど、この国では直系だけが跡を継げる決まりだ。

オルヘン伯爵家は父の家系。そして父に兄弟姉妹がいなかったことから、跡取りになれるのはもはや私だけ。

つまり、私に何かあれば爵位と領地は王家に返上しなければならない。

義母はそれが気に入らないと何度も癪癪かんしゃくを起こしていた。

『何も知らず甘やかされて育った小娘の癖に！ お前なんかのうのうと生きているだけで当主になれるですって!』

国の決まりなんだから仕方ない。私が決めたことじゃない。

だけど、そんなこと義母にとってはどうでもいいことなのだ。

腹が立つから、目の前の私を癪なぶる……そんな理不尽な八つ当たりで、鞭で何度叩かれたことか。

彼女がこれまでどんな暮らしをしてきて父の後妻になったのか、私は知らない。

でも言葉の端々から察するに苦労はしてきたのだろうし、貴族に対して憧れと憎しみの両方を抱いているようにも思う。

だから何もしなくても当主になれる私のことが腹立たしかったに違いない。

しかし私を手放すことは義母と義妹にとって身分を手放すということ。

私の後見という立場を失えば、彼女たちは戻る生家と呼べるものではなく、父と出会う前の身分に戻るしかない。

それを考えれば私という駒を簡単に手放せるはずもなかったのだ。

嫌い、憎み、内心で見下していた義理の娘を頼らざるを得ないのは、きっと義母にとって屈辱だったに違いない。今ならよくわかる。

だから、愛情を持って自分を支えさせる……なんて楽な方法を彼女は選ばなかった。

あの人は、依存よりも支配を選んだのだ。

『あんたは今日からメイドよ！ あたしに逆らおうなんて思うんじゃないわよ？ 小娘が一人で騒いだところで、だあれも信じちゃくれないんだからね。ははっ、いい気味だわ!!』

冷たく言い放たれた言葉、冷たい床に座る私。

信じたくない現状だけど、私はそれを受け入れるしかできなかったのだ。

そう——彼女の言葉は正しい。

まだ当時幼い私には、世間に対しての発言力なんてものはなかった。

父が再婚してから死ぬまで、義母は「善き妻」であり、「善き母」だった。

『実の両親を失った長女は、心を少し病んでしまったの……』

夫を亡くしたばかりで憔悴する様子を見せた義母がそう周囲に言えば、誰もが納得した。

私がいくら違うと訴えたところで、周囲はすっかりあちらの味方だった。

それまで理想的な後妻として振る舞っていたのだから、当然と言えば当然のことだろう。

当主を亡くして急遽代理となった彼女が忙しさゆえに構えなくなっただけで、長女が癩癩を起こしている、嘘うそを言っただけを引こうとしている、友人知人に当たり散らしてしまっただけで、後々あの子が落ち込んでしまっただろうから今はそっとしておいてほしい。

そう彼女が涙を浮かべて周りの同情を得てしまえば、当時の私には対抗手段がなかった。

逆に周囲から『あんなに優しい義母を困らせてはいけないよ』となんて窘たじまめられる始末だ。そうして私はいつの間にか、孤立していた。

それどころか、両親を亡くした哀しみから引き籠もるようになってしまった……ということになってしまったのだ。

何故それを知っているかと言えば、わざわざ義妹が教えてくれたから。

以前と変わらない、可愛らしい笑みを浮かべて小首を傾かげた義妹。

ただその声は、やっぱり私が知らない悪意に満ちたものだった。

『可哀想かわいそうなお姉様！』

当時私わたしが羨うらやみとして義母に閉じ込められた地下の食料庫。

寒くて暗くて怖かった。

その扉が開いて義妹が顔を覗のぞかせてそう言ってくれた時、助けに来てくれたのだと当時の私は愚かにも信じ切っていた。

だけど、彼女は可愛らしい笑みを浮かべながら、聞いたことのないような刺々とげとげしい言葉を次々に紡ぎ出したのだ。

『あんたなんてこの家を手に入れるための奴隷でしかないのにね。すっかりわたしたちは、厄介なオルヘン家の長女に誠心誠意尽くしている。可哀想な母娘おやこってことになっているの。バカよねえ？ ちよお！ とか弱いフリしたら、みいんなチヤホヤしてくれるんだもん！ あーあ、なんて楽しいんだろー！』

嘲笑いながら私を見下すその目は、義母と同じで私を嫌うものだった。
どうして、なんでとその時はただ混乱するしかできなかった。

『もうお姉様は伯爵令嬢に戻れないわね、諦めたらどう？ 家族ごっこも最初は楽しかったけど、もう飽きちゃったのよね』

—— 何もできなくてごめんなさい、わたしのお母様がごめんなさい。

『期待通りの絶望顔、最高だわ。ありがとう、お・ね・え・さ・ま』

—— お姉様、大好き。

可愛く、私の味方でいてくれたはずの義妹。

見下し冷たい目で私を嘲笑う義妹。

クスクス笑う彼女のその言葉に、愕然がくぜんとしたあの瞬間が忘れられない。

彼女だけは私の味方だと思っていたの。

義母に殴られた時も、部屋に閉じ込められて三日間食事を抜かれた時も、カトリンだけが心配してくれた。たった一人の、私の味方。そう思っていた。

（あの子だけは、偽りじゃない私の「家族」だって信じていたのに）
私はきつと愚かだったんだろう。

お父様も、義母と義妹の本当の姿を知らなかったんだろうけど……まったく、父娘揃って間抜けだとあの人たちに笑われても言い返せやしない。

だけど、騙す方が悪いに決まっている。

そう思わなければ、やってられなかった。

（……私が何をしたっていうんだろう）

貴族の家の娘に生まれて、何不自由なく暮らしていたくせについて言われたけど。

でも十二歳で父を亡くしてから今まで、私は虐げられて育った。

それって、そこまでされなきゃいけないことだったろうか？

義母の連れ子のカトリンは、私の父のおかげで貴族同然の生活を送っている。

父が亡くなった後も、私が未成年のうちは保護者である義母が代理当主になっているおかげで彼女たちは今もその恩恵に与^{あずか}っている。

私の存在が彼女たちの益になっているのは、間違いない事実。

だけど……あの二人にとっては、そんな事実すら許せないらしい。

（……私が跡取りだから）

義妹のカトリンには、オルヘン家から継げるものは何もない。

私が跡を継いだら彼女には何も残らない。だってお父様と繋がりのないあの子は、オルヘン家の人間ではないのだから当然と言えば当然だ。

むしろあの二人は姻族関係が終わった今、オルヘン家を出て行かなければならない立場にある。

それが、とにかく許せないらしかった。

ただ貴族として生まれただけの私が、いつまでも貴族でいられることが許せないと。

自分たちにもその権利はあるはずなのだと……。

(そんなこと私に言われたって困るわ)

法律で決まっていることに文句をつけたいなら私に言うのはお門違いじゃない？

私が伯爵家の娘に生まれたくて生まれたわけではないし、逆を言えばカトリンは平民に生まれたかったわけでもないのだし。

最初から何でも持っていたなんて言われても、私にどうしろっていうんだろう。

怒りを気力に変えて、ずんずんと田舎道いなかを歩いていく。

歩いても歩いても目的の村までたどり着ける気がしないけど……でも今はそんなことも言っていない。だからこうして過去を思い出しては怒りを気力に変えているのだ。

ただ、考えれば考えるほど、余計なことも考えてしまう。

腹立たしい。悔しい。

そんな気持ちが大半だけど、その中に少しだけ、本当に少しだけ……寂しさがある。

妬ましいとか、羨ましいとか、そういう気持ちは否定しない。

同じような気持ちは私の中にもあるからだ。

（だけど……それをぶつけられたって困るの）

どんなことがあっても法律上、カトリンがあの家を継ぐ方法はないのだから。

いくらあの人たちにズルいと言われたって、私にはやっぱりどうしようもないのだ。

そもそも平民、かつ、連れ子のいる義母のラモーナが貴族である父と結婚できたのは、跡取りである私がいたからだ。

伯爵家から下の貴族家は、正式な跡取りがいる場合のみ、平民を再婚相手として認める……ということが法律で定められている。

私も本で少しだけ読んだだけで、その法律の成り立ちだとかどのくらいそういった再婚例があるかまでは知らないのだけど……。

（あの人たちの目的は、貴族としての生活を楽しむことだったのよね）

父が生きていれば、カトリンもオルヘン家と関係ある下位貴族やそれなりに裕福な商人と出会うこともできたろう。養子縁組すれば、貴族家に嫁げる可能性だってあった。

オルヘン伯爵家の運営が安定していれば、こっそり蓄財したり父の目を盗んで遊びほうけることだってできたのだろう。

（今更お父様に文句を言いたいとかそういうことはないけれど、いくら周囲から娘を育てるには女親がいた方がいいとか勧められたにしてもうちよつと……）

こう、女性を見る目がなかったのかしら……って、私も私で父が亡くなるまであの人たちのことを素敵な家族だと信じていたんだから同じようなものだったわ。

義母は私を恐怖で縛り付けて、自分の息のかかったど・こ・ぞの令息と結婚させるつもりでいるのだと笑った。

名ばかりの婚約者は、義妹と一緒にになって私を嘲笑いに来て『好みじゃないけど、まあ聞じゃ灯りを消せば何とかなると思うよ。なんなら、今から試してみる？』なんて笑いながらとんでもないことを言ってくるような男だったので絶対に願い下げだ。

「それにしても、村はまだ見えないのかしら……」

途中で通りがかった荷馬車の人にはこのまま真っ直ぐ行けばいいって教わったんだけど、全然たどり着く気配がない。

残念ながら私が目的とする村方面から町に行く人だったので、荷馬車に乗せてもらうこともできず……とはいえ方角があっているとわかっただけでも助かった！ とその時は思ったのよね。

けれど、歩いてても歩いてても、全然景色が変わらない気がするわ……！

日が暮れる前には着いていないと困るのだけれど!?

(やっぱ、無謀だったのかな)

疲れてくると、考え方も悲観的になりやすい。

頭ではわかっていても、実際やっぱりそんなことを考えてしまう。

私の脱出計画はこうだ。

オルヘン伯爵領の最も大きな町とは反対方向に進み、途中にある小さな村で乗合馬車に乗って隣の領をまず目指す。

隣の領は国境と接しているということもあって人の出入りが激しいというのを商人さんから聞いた。

ていたから、そこで短期間の仕事を見つけるか、日雇いでもいいから……できたら裏方か何かで長期間働ける方がありがたいけど……とにかく、まず寝食をなんとかする。

そこでお金を稼ぎながら生活をする傍らオルベン伯爵家から私がいなくなったと気づいた彼らがどんな行動を取るかを警戒しつつ、辺境の領地でなんとかできるならそのままで。

搜索の手が伸びてきそうなら貯めたお金でまた別の領地へ移動する……という予定だった。

正直計画もへったくれもない、世間知らずの考えそんなことだと旅慣れた人に鼻で笑われそんな代物だと自分でも思うけど……ずっとじゃない。半年だけだ。

半年を乗り切りさえすれば、あとは貴族院議会に飛び込めばいい。

あそこは成年でない限り保護者を呼ばれてしまうけれど、成人さえしていれば身元の調査が入る……って法律の本に書いてあった。

貴族をせんしやう僭称する者を罰するため、だっけ。

たとえ私が貴族として認められなかったとしても、オルベン伯爵家に調査が入ってくれるならきっと彼らの迷惑を暴いてくれるだろうし本望だ。

でも、まず最初の村にたどり着くことができないのではなんにもならない。

(……それこそ町で乗合馬車を利用して村を目指した方が間違いないかったかしら)

あの人たちに見つからないように大きな町を避けたのだけれど、それが悪手だったんだろうか。でも、義母たちも私がいないと気づいたらまずは乗合馬車や町中で私の特徴を聞いて回るんじゃないだろうか。使用人が悪さをして逃げ出した……とかなんとか言っただけ。

大きな町で乗合馬車について詳しくないから人を頼ってなんとかできたとしても、そこからすぐ

に足取りがバレて連れ戻される可能性の方が高い。

それなら、やっぱり多少無謀に思えても、歩いて村を目指す方が安全なような気がする。

うん、きつとそうだ。

（どうか、どうか……上手くいきますように！）

ポケットの中にある、小さな鈴を握りしめる。

それは幼い頃にもらったお守り。

もらった時には綺麗な色だったのだけれど、今じゃすっかり塗装が剥げてしまっただけで見る影もない。

私に残された数少ない思い出の品。

そして……私の心の寄る辺でもあった。



このお守りをもらったのは、私がまだ幼く——母が元気だった頃の話だ。

母方の祖父母のところ遊びに行つた際、そこで知り合つた男の子からもらった。

『これはね、かあさまからもらった、とっても大事なものだ』

『リウイアにだからあげるの』

（あの時、私はあの子になんて答えたんだっけ……）

もう思い出せないくらい幸せな、幼い頃の思い出。

大事な宝物を私にくれたあの子は元気だろうか。

もう、顔も名前も覚えていないくらい、昔の話。

元々は二つでワンセットだというお守り。

(仲良しの証^{あかし}だつて、片方渡してくれたのよね)

鳴らない鈴を、陽にかざす。

この鈴は、もらった当初から音が鳴らない。

塗装の剥げた鈍色^{にびいろ}が、太陽の光を受けて輝いた。

(……もうあの頃いた人たちは、みんななくなっちゃった……)

鳴らない鈴は、まるで今の私と同じ——役割をなくしてしまった存在のようで、なんだか少しだけ笑えた。

何度あの頃に戻りたいな、なんて夢を見たことか。

でもそれは夢でしかないから、私はただ精一杯、生にしがみついていた。

カトリンがそんな私をみつともないって嘲笑っていたけれど、自分の未来を諦めないことの何が悪いんだろう。

「……助けが呼べたらよかったのにな」

ぼつりと思わずそう呟^{つぶや}いた。

だって私は独りぼつちで、心細くてたまらない。

逃げ出したっていう解放感よりも、怖い方が勝る。

世間知らずな自分が何かミスをしていないか、私の浅い考えを見抜いたあの人たちにあつという間に捕まえられてしまうんじゃないかって、不安でたまらない。

大丈夫だよ、頑張ったよって励ましてくれる人がいたらと思うのは弱さだろうか？

そんな人がいてくれたら、どれほど救われたことだろう。

まあ、いないんだけど！

現実逃避しないで、頑張って歩くしかないよね！

（足が痛くなってきちゃった……。けど、止まるわけにはいかないもの）

そんな私の前方から、一頭の馬が駆けてくるのが見えた。

こんな田舎道で馬車じゃないなんて珍しいな……。なんて思いながら、私はそれを避けるために道の端に寄ったのだけれど……。何故か、馬は私の前で止まったではないか。

そこまで狭い道でもないし、邪魔だと言われるわけがない。

ということのままかもう見つかったのかと心臓がバクバク音を立て始めた私をよそに、馬上の人がひらりと地面に下り立ち、私の前にひざまず跪いた。

ぎよっとする私を前に、その人は心底嬉しそうに微笑む。

「ようやく見つけた」

まるで大切な宝物を見つけたかのように、万感の思いってこういうことか……。と思わせるような声だったけれど、私はそれどころじゃなかった。

（……えっ、誰え……？）

そう、私はこんな人知らないのだ。

私の前に下り立ったのは、見たこともないほど綺麗な男性だった。

陽の光を受けた黒髪は青みがかっていて、目はキラキラとした金色で……。シンプルな旅装なのに、

この人はきつと貴族、それも高位の人に違いないと思わせる存在感と気品がある。

そんな人が目を細めて、本当に本当に嬉しそうに微笑んだのだ。

その破壊力ったら！

義母と義妹もかなりな美形だと思うし実際そうだと思う。あの人たちも、見た目だけなら行き交う人たちの十人中半分が振り向くであろう美女だもの。

彼女たちが社交界に出てからは引つ切りなしにラブレターが届いているのがいい証拠。

けれど、この目の前の人は男性なのに、そんな彼女たちよりもずっと美しい。

男性にその表現を使うのが正しいのかはわからないけれど、そうとしか言いようがない。

そしてそんな美しい人なんて、私の記憶にはいない。

誰と間違えられているんだ!? と慌てる私に、彼は嬉しそうな顔のまま言った。

「搜したんだよ、リウィア。君が今もお守りを持っていてくれてよかった」

「えっ」

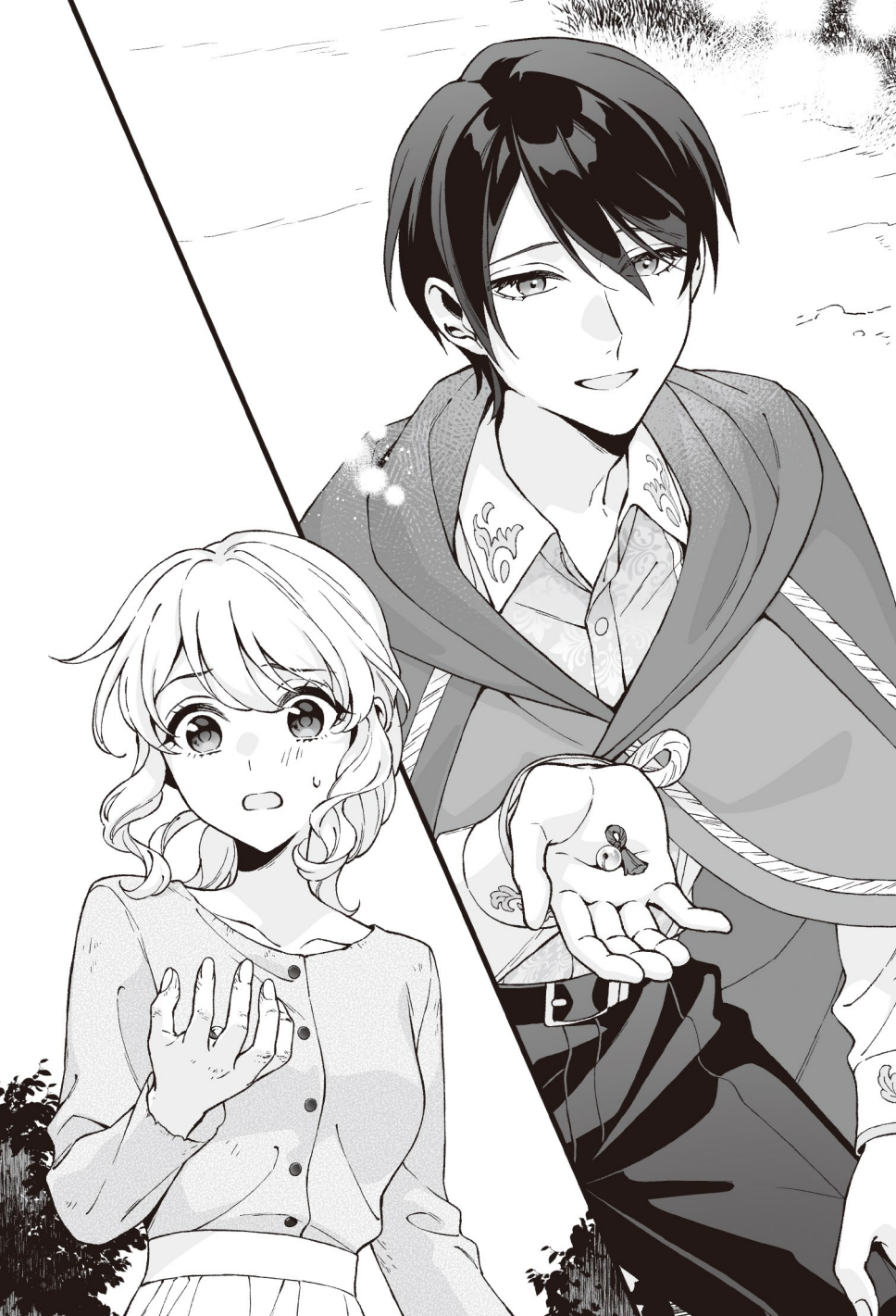
その嬉しそうな笑みがあまりにも綺麗で見^み蕩^とれていると、彼はにつこり笑って懷から何かを取り出して私に見せてきた。

それは、小さな鈴だった。

「えっ！」

思わず私もお守りを取り出して見比べる。

私のものに比べると幾分かまだ塗装が残っているけれど、同じ形で……いや鈴なんてどこにでもあるからこれは偶然。そう、偶然……。



(つて偶然……なわけない！)

だって私の名前も呼んでいたし、わざわざこんな美形が私なんかに嘘つくためにこんな古ぼけた鈴を出してくる意味がわからないもの!!

それに、この鈴のことを知っているのは、今は亡き母だけ。

何故かあの時、お母様はこの鈴を見て私に『お父様には内緒にしましょうね』って言ったのだ。その後すぐに流行病で儂はかなくなられたからどうしてそのように仰おっしゃったかはわからないまま。つまり、この鈴のことを知る人は私と、鈴の本来の持ち主だけになったわけだ。

「えっ……えっ!？」

でもどうしよう、予想外のことすぎて反応に困る。

そりゃいつか、再会できたらいいとか子供の頃は思っていたわ。

思っていたけれど……その気持ちも吹っ飛ぶような状況になった今!？」

しかもうる覚えだけれど、あの時の子って私よりも小柄で痩せっぽちだったわよね!？」

(そりゃまあ、あの子が私と同じくらいの年齢だった、の、なら……確かに彼が大人になっているのは当然のことなんだけれども!)

まさかこんな美青年と、臃おぼろげ気な記憶の少年を結びつけるなんて無理よ!

あら? でも待って?」

なんだか怒濤どとうの情報に頭がついていけないけれど、今聞き捨てならない言葉がなかった?

「捜した……? えっ、私を捜してたの?」

「そうだよ、リウイア」

当たり前のことだと言わんばかりに、私は呆氣うなずに取られるばかり。

どうして？ 私なんて思い出だもんなあ……くらいに感覚だったのに!!

「その様子だとリウイアも僕のこと覚えてくれていたんだね。嬉しいな」

「えっと……」

「二人でよく手を繋いで草原を走ったろう？ 花冠の作り方を教えてくれたのはリウイアだったよね。僕はいつも上手くできなかった。結局、綺麗な花冠を君に作ってあげられないまま、お互いの事情で会えなくなってしまった」

ニコニコと彼が語る思い出は、私とあの子しか知らない出来事だ。

いや彼の名前を思い出せないし、私の中の思い出は、♪楽しかった♪程度でしかない。

むしろ、そんな詳細に覚えていることの方にびっくりして言葉も出ないんだけど……これはどう対応するのが正解なんだろうか？

知らないって突っぱねた方がいいの？

でも、もし、もしも……本当に善意だとしたら？

「あ、あの。えっと、なんていうか」

「ああ、成長して結構見た目が変わったから困惑させちゃったかな……でも信じて。僕は小さい頃にリウイアと一緒に遊んだテオだよ」

「テ、テオ……」

そうだ、そんなような名前だった気がする。

しかし成長して見た目が変わったって……顔立ちは覚えてないけど、すごく小柄な子だったこと

は確かなんだけど、男の子ってこんなに変わるものなのね！

「驚かせちゃってごめん。でも会えてすごく嬉しくって、つい。びっくりしたよね」

「そ、そうね。すごく、びっくり、したわ」

「僕のこと、忘れてないよね？」

「え。ええ！ もちろんよ!!」

名前は忘れちゃってたけど……存在は忘れてないから、これは嘘にはならないわよね？

なんだろう、テオの声って優しいんだけど、なんとなく圧を感じるわ。

これはきつと罪悪感のせい。

そう、よね……？

正直本当にうっすらしか覚えていないから、彼の言葉が嘘かどうかを判断するのはその思い出話と鈴の存在でしかない。

わざわざそんな幼少期の思い出を騙る必要を感じないから、本当に彼なのだろう。

当時の私は、彼のことごとくとも好きだった。

母方の祖父母も貴族で、幼少期……当時、母がまだ生きていた時はよく遊びに行ったものだ。

祖父母の領地は隣国である獣人の国「メギドラ」と接した、静かな土地だった。

母方の従兄弟たちとは会えば喧嘩ばかりだったので、遊び相手ができたと思ってすごく嬉しかったことを覚えている。

（今はどうしているのかしら……）

義母と義妹が先方を怒らせてしまったらしくて、没交渉になったそうだけど。

あの人たちが何をやらかしたのか、怖くて知ろうともしなかったけど……いつか、伯爵家を継いだら謝罪の機会があるといいなあ！

それはともかく。

その国境沿いには大きな森があつて、その森近くの草原が私のお気に入り場所だつた。ある日、侍女や護衛を連れてピクニックに行つて……そこで、テオと出会つたのだ。

（そうよ……そう、だわ）

こうして本人を前に話をして、思い出が輪郭を持ち始める。

黒髪に、金色の目。

あの時は私よりも年上とは思えないくらい背がちっちゃくて、随分と痩せっぽちだつた。森の中からこつちを見ていたのを私が見つけて、引つ張り出したのよね。

（いっつもオドオドしていたっけ）

私よりも背が小さかつた男の子。

その面影が、目の前にいる彼にようやく重なつた。

「ず、随分と背が伸びたのね……!!」

「……ふふ、うん。そうだね。すっかり成長したろう?」

「ええ、ええ、びっくりした!」

「あの頃は頼りなかつたかもしれないけど、今はどうかな」

「すっかり男の人って感じだわ」

「そう? リウイアにそう言つてもらえると嬉しいな。……あの頃は、君に守つてもらつてばかり

だったからさ」

「……そうだったかしら？ でもあの頃に比べたら遅たぐましくなったと思う」

思い出してきた。

あの頃のテオは、とっても可愛かったのだ。

目がくりくりしていて、照れ屋さんなところがあつたから、他の大人たちのことは苦手で私の後ろに隠れちゃうところがあつた。

（だから守ってあげなくちゃって思つたのよね）

今思うと何言っているんだって話なんだけど……。

あの頃は子供特有の全能感っていうか、そういう感覚だったのかもしれない。

当時の私はお転婆だった自覚はある。きっと、森の中から現れた得体の知れない少年と交流を深める私に、一緒にいた使用人たちも随分と手を焼いたに違いない。

（いや申し訳ないわあ……）

今思うと、とんでもないことしてるわね！

それでもテオとたくさん遊んだ記憶があるってことは、最終的に許してもらえたってことかしら。いや、臆気な記憶の中で、あの頃のテオがあまりにも弱々しかったから危険はないと判断されたのか……あるいは痩せっぽちの子供に同情したのか。

どっちもありそう。

うちの両親もなんだかんだお人好しだったし。

「そういうえば、私を捜していたって言ったわよね？」

「そうだよ。積もる話もあるからここじゃなくて近くの村に行かない？ その様子だとリウイアはそっちに用事があるんだろう？」

その言葉に、思わずドキッとした。

果たしてテオは味方なのか、敵なのか。

このタイミングで突然現れた彼に、私はどう対応するべきなのか……。

懐かしさと思ひ出話に花を咲かせている場合じゃないのだ、私は。

「……この道を行った先の村のこと？」

「うん、そうだよ」

「テオはそっちから来たのよね。戻って平気なの？ 他に用事はないの？」

私はにこりと笑ってみせる。

彼が味方が敵か判別できないなら、当たり障りない会話をしてやり過ごすしかない。

いずれにしても私の目的は変わらない。

あの人たちから無事に逃げ果^おせること。今はそれが何よりも重要。

(テオが味方であれば……嬉しいけど)

でも昔少し遊んだだけの相手を信頼しろという方が無理だ。

懐かしさはあっても、目の前の「テオ」は……私にとって知らない人も同然なのだから。

「そうだね、僕もその村にさっきまでいたんだよ。村の名前を聞く前に、リウイアの匂いがしたから飛び出してきたかった」

「え？」